
Only Heart ~ 学生編 ~

麻奈海 茶和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Only Heart 学生編

【Nコード】

N8330N

【作者名】

麻奈海 茶和

【あらすじ】

時は2998年22世紀になる二年前から物語は動き出す。

約500年前人類は滅亡した。

そして神は人間を作りなおした。

それは500年後には「終末」と語り継がれている

：

今とさほど変わらないようでとても違う未来の物語。

狂ってこゝろのはいじの世界。

episode 1 平穩(前書き)

元々漫画の原作として書いたので、少々漫画チックかもしれませんが。
小説書くのははじめてなので、暖かい目で見て…下されば…ウレシ
イデス……ハイ。

感想なんかもお聞かせ頂けたら尚うれしいです。

episode 1 平穩

人間よ私を惨めな姿にした動物。
人間のせいで私はもうあの気高い姿には戻れない。

神よ何故人を許し、私を呪うのだ。

許さない許さない許さない憎いに許さない許さない許さない許さない
憎い許さない憎い憎い憎い許さない憎い憎い憎い憎い許さない許
さない憎い憎い

人も神も私が……この私が……！！

変えてやる……！！

例え何億の月日を経ようとも。
神を消し去り、人を呪われる者とする。

そしてそのあかつきには私が新たな神となる。

西暦2998年12月19日

いつもの朝のように俺は7時に起きようとしたが、二度寝をしていたら母さんが部屋まで来て、

「いい加減起きなさい。」
と起こされた。

しぶしぶ起き出し朝食をとる。食べながらテレビのニュースを見ていた。

昨夜(多分)フィリピンのどこかでテロがあつたとか。特に気にしなかったが、それを聞いてた母さんが、

「ふーんこわいわねえ。」
と呑気に言っていた。

朝の時間をそんなふうにごろごろしていたら、いつのまにか登校時間になっていった。

俺はすぐさま制服に着替え、スクールバックを持って家を出た。

行ってきまーす、と言つと少し遠くから母さんの行ってらっしゃー

いと言う声が聞こえた。

季節は冬。登校しながら街を見ると、もうすっかりクリスマスで、並木にはびっしり電飾が付いていたり、店の飾りもクリスマスのものがほとんどであった。

途中で教会の牧師、もしくは神父が、
「皆さんクリスマスの本当意味をご存知ですか。」
と通行人に語りかけていた。

学校の門前で

「志紋」

と名を呼ばれた。見るとそこには妹がいた。

「今日もなんとか間に合ったわね。はい、これお弁当。」
俺の妹、桜雫さくらた 真璃夜まじやは血の繋がってない同い年の妹だ。

血は繋がってないので似るハズもないが、真璃夜は俺とは違い、眉目秀麗、弓道も高校生の全国大会で優勝するほどの実力者でもある。
「サンキュ。いつもありがとー！…なんだけど昨日俺が作ったやつだけだな。」

「お母さんも私も料理は不得意だからね。志紋いつもありがとう？」
何故疑問系なのかと言おうとしたが、俺が朝が弱くて弁当を忘れるので、こうして真璃夜が届けに来てくれるので、文句を言う資格はなかった。

「でも校門で待っていてくれなくても構わないぞ？俺毎日ギリギリだし。」

そう言うと真璃夜は静かに笑いながら、
「気にしなくていいわよ。朝練終わった後って暇だし、好きで待ってるのよ？」

「でも一応お前優等生なんだし、遅刻したら単位落ちて困るだろ。」
一応ってなに、と少しムツとして見せたが演技らしく、すぐ元の表情に戻りこうつぶけた。

「私が自分を優秀だと思っている訳ではないわ。
周りがそう思ってるだけであって、他人の意見なんて私はどうでもいいの。」

それに日頃の行いが良いからたまに遅刻したって痛くも痒くもないわ。」

やはり真璃夜は賢い(いろんな意味で)立派な確信犯である。

教室に向かって歩いてしていると、あっそういえばと真璃夜が思い出したように言った。

どうしたと訪ねると、

「今朝教会の牧師さんかしら、街で人に話しかけてたのよね。クリスマスの話だと思っただけど。」

「俺もそれ見たよ。昔に比べてキリスト教増えたよなあ。」

俺達も一応キリスト教徒である。

真璃夜も教会の孤児であったのを教会に行っていた母さんが養子にしたのだ。

「そうね。私のクラスの子もキリスト教の人多いみたい。」

やっぱり終末が関係してるのかしら？」

終末とは聖書の最後に書いてある話のことだ。

新しい世になり、前の世界が終わると言うものだ。

今から500年ほど前に人類は滅びていなくなったらしい。

だが神が新しく人を作り直し、今の世界になったんだとか。

それが正式な神の言う終末だと俺と真璃夜が小学校に上がった頃、世界中で話題になった。

「でも500年前の事って謎が多いらしいのに、よく正式にできたよな。」

それに今新しい世界？な訳だけど、なんか聖書に書いてある話と全然違う気がするんだけど。」

「何か迫力がないわよね。もっとメルヘンな感じが良かったわ。」
メルヘンとは具体的にどういう感じなのだろう。

「母さんは未だに納得出来ないらしいけどな。」

俺達も終末が正式になる前は教会に通っていた。

母さんは未だに終末が受け入れられないらしく、それが理由かはよくわからないが、教会には行かなくなった。

「お母さんももっとメルヘンな世界がよかったのよ。女の子ですもの。」

それは違うと思う。…思いたい。

そんな他愛のない話をしてるうちに二年の校舎について、それぞれの教室に向かった。

毎日学校に行き、友達と話したりふざけたり、学校が終わったらバイトをし……平凡とも言えれば平穩とも言える日々を俺は毎日過ごしている。

今も窓の外を見ながら、じじくさいが 平和だなあ、とボーっと思っていた。

「今から約500年前みんな知ってると思うけど、終末が来た訳よ。10年ぐらい前すごい話題になったよね。」

今は歴史の授業である。五時限目と言うなんとも眠くなる時間の授業だったが、朝の話題とかぶったので耳がそちらへ少し向いた。

「人類が一回滅びて新しくなったのが今の世界な訳なんだけど、終末を詳しく綴った書物がなかったから最近って言っても10年前までは終末が本当なのか伝説みたいなものなのか曖昧だったんですよ。でも終末を正式なものにした決定的な歴史的証拠ってのがあるんだね。」

ここテストに出るからよく聞くように、「とベターなセリフを先生は言った後再び話し始めた。

「前の世の人つてのは心臓って言う臓器があつたとされています。医学関係の書物には絶対と言っていいほどの臓器は載っています。それほど重要な臓器だった訳です。前の世で使つてたとか言う人体模型なんかに心臓がついていたりします。

かわいい形に書いてあつたりすることもありますが、実際はなんとも言えぬ気持ち悪い形をしています。」

昔の人に謝れ。

「そんな昔の人にとって命であつたとされる心臓ですが、私達にはありませんね。

誰でも答えられるとは思うけど一応指します ……じゃ桜栗君今の私達の命ってなーんだ？」

指すというより、ナゾナゾを出すような先生の問いかけに少しイラツときたが、静かに立ち上がって答えた。

「……マナです。」

はい正解ありがとう。と先生が軽く言つて俺は静かに席につく。

「今の私達の命つてのはマナですね。

お葬式で休息につくマナを見たこと何回かあるよね。

大きさは手のひらほどで赤くてキラキラしたやつです。

教科書の資料に載ってますね。

体のどこかしらが大きな損傷を受けたり、病になつたりすると私達は死んでしまうね。

それは昔の人も一緒なんだけど、マナと心臓はまた少し違うんだよね。

昔の人つてのは死んだら心臓が止まつて、ハイおしまい。だったんだけど、マナは人に壊されるか眠りにつかない限りまた違う人として生きますね。

リサイクルされた知り合いのいる人手上げてみてー」

教室の中で少人数の人間が小さく手をあげた。

上げたのは一部の正直な生徒であり大半の生徒は面倒臭がつて上げてないだろう。俺もそうだった。

「はい、ありがとうございます。
結構いるよねマナにも眠りがあつて生きていた、起きていた分、休息を与えてあげなきゃいけません。
ただどまだマナが眠りについていない時死んでしまった場合、また新しい人間として生きることになります。
そのことをリサイクルと言います。
あー眠りについて起きた後もまたリサイクルをして違う人間として生きている人もたまにいます。」

この内容の授業は色んな教科で話す内容なので耳にタコだった。
最初のほうは結構聞いてたものの次第に眠くなつてきて、あくびをした。

「マナも粉々にしてしまえばもうリサイクルされません。絶対にしないように。当たり前ですが。」

この先生にしてはまじめな口調で言っていた。

「あとリサイクルされるからって、自殺みたいなバカな真似はしないで下さいよー。」

自殺のほうはどうでも良さ気に見えた。

暇だ。眠い……平和だ。

放課後。真璃夜のクラスのほうが早くホームルームが終わったらしく、俺のクラスの前まで来ていた。

真璃夜は優等生でもあったが学校一の美少女でもあってよく目立った。

そんな妹を持つて鼻がたかいようなプレッシャーなような、他人の視線が慣れてはいたが、結構痛い。

「朝以外で俺のこと待つてるなんて珍しいな。」

部活早く行かなくていいのか？」

そんなに待つてない、要件が済んだらすぐ行くと言って更につづけ

た。

「朝言いそびれちゃったんだけど、お母さんが私の全国大会のお祝いずつと出来てなかったから、今日してくれるらしいの。」

クリスマスは志紋がバイトで忙しくなるからそのお祝いも兼ねてですって。」

「オツケーわかったけど今日バイト19時ぐらいまでシフト入ってたから真璃夜、母さんと先に行つて。俺も後で行くから。」

「わかった。駅前のフランス料理のレストランだから8時半待ち合わせでいいかしら。」

了解と言つたら真璃夜はじゃあね、と小さく手を振つた。が、もう一度振り返つて

「遅れないでね」

と言つて去つて言った。

俺はこの時後に起こる出来事のことなど知る由もなかった。

バイトも早めに終わったので俺はバイト場に近いデパートで母さんと真璃夜のクリスマスプレゼントを買おうとデパート店内に居た。「昨日フィリピン郊外のカトリック教会でテロがありました。」

テロ組織は近年過激な行動が目立つ、反キリスト教の団体で、約120のマネが破壊されたという報告が……」家電品店のテレビでニュースが流れていた。

どうやら新聞でもニュースでもこの話題で持ちきりのようだ。

母さんにはマフラーをセール品であつたが購入。

真璃夜には小物やアクセサリが無難だとは思つたが、真璃夜は無欲な奴なので、いまいち趣味がわからなかった。

(真璃夜の好みといえば……あ。)

そこにあつたのはネコにも見えればブタにも見えイッカクにも見え

るような一部のコアな女子に絶大な支持をつけている(らしい)サイのマスコット、ワタナベさんがいた。

「やっぱりアイツにはコレしかないか。」

真璃夜の部屋にはこの得体の知れないサイっぽいものが散乱している。

上・下・右・左どこを見てもワタナベ、ワタナベ、ワタナベ、ワタナベ。四方360度ワタナベがいる。

真璃夜はこのワタナベを何故かは知らないが溺愛している。

好みのわかりにくい真璃夜だが、だいたいワタナベを贈れば解決する。たまに母さんとも被るが。

(アイツ、ワタナベの事になるとキャラ変わるよな)

そう思うと少し笑いそうになった。

ワタナベのストラップを購入した俺は待ち合わせの場所に向かっていた。

途中何台ものパトカーが横切って行った。

(交通事故か？にしては数が多いような……何かあったのか?)

パトカーが横切って少しして携帯がなった。

(誰だ?)

「はい。」

「こちら x 病院の者です。桜雫真璃夜さんのご遺族の方ですか?」
不安がよぎる。

「至急 x 病院までお越し下さい。」

急いで俺は病院へ向かった。

ドクンと何かが急速に跳ねている。

(五月蠅い…静まれ!…)

だがそれは静まることはなく不安を一層掻き立てた。
病院に着き、受け付けに行く。

「あの……桜雫……真璃夜の……遺族ですが……」

息を切らしながら話す。

「桜雫様ですね少々お待ち下さい……………205室です」

病院内だがその時は考えもせず走った。

205室に着くと、そこには医師と看護婦がいた。

「あの……真璃夜は……？」

医師は口を開いた。

「残念ですが……」

いやだ

聞きたくない

「お亡くなりになりました。」

この日を境に俺の平穩は狂っていった。

episode 1 平穩（後書き）

携帯投稿で読みにくかったので少し修正しました。

e p i s o d e 2 代わり(前書き)

感想もらえたらうれしいです。

episode 2 代わり

これは夢じゃないだろうか。そう思いたかった。

真璃夜は頭が良くて、運動神経も良くて、美人で、何でもそつなくこなせる人間だった。

性格は落ち着いていてクールで。

時々人に冷たいと誤解されていたが、優しくて面倒見が良かった。

よく妹ではなく姉にまちがえられた。

俺は真璃夜の笑った顔が好きだった。太陽みたいに笑うと言うより、月のような笑顔だった。

太陽ほど明るく眩しい笑顔ではなかったが、人を安心させる静かだがやさしい月の光のような笑顔が。

俺は真璃夜を尊敬していた。

そして憧れていた。けしてかなうことのない憧れだとわかっていて。

でもせめてずっと傍にいたかったんだ。

「真璃夜が・・・死んだ？」

無言で医師は頷いた。

「あなたが来る少し、本当に少し前に亡くなってしまい、マナだけに。」
病室内に、透明のケースがあり中に赤い宝石のようなものが入っていた。

キラキラというよりはキラキラした光だった。
ふとその時、

(母さんは？母さんは無事なのか？)

「あの、母の桜雫沙羅は？」

母さんも一緒だったはずだ。だが母さんの姿はどこにもない。

「死後からから時間がかなり経過したのか、マナだけになってしまったようで、今警察が搜索しています。」

「母さん……も死んだってこと……ですか？」

医師は苦い顔をして、

「助かつてはいないかと……」

俺は視界が真っ暗になった。ただマナの赤いキラキラした光が見えたが、その光は俺を照らす希望の光ではなく、絶望の光に見えた。

母さんは朝俺を起こしに来た。

俺が家を出るときいつものように、いつてらっしゃい、と言ってくれた。

真璃夜はいつものように校門で俺を待っていて、弁当を届けてくれた。
優しく笑っていた。

いつものように、平穏な一日のはずだった。

だけど

なんで

どうして

二人が死ぬんだ。

無差別殺人。人通りの多い駅付近の商店街で事件は起こった。上から人々を銃殺。6人が重傷、15人ほどの死亡者が出てしまった。

3人の人間による犯行だった。殺人の動機は

「外国でライフルが手に入ったので、人を撃つてみたかった。」

殺人をする人間のありがちな動機。

そして、

「どうせまた代わりができるので、いくら壊してもリサイクルされると思った。」

マナを壊すよりは刑は軽いと考えた。」

いくら死んでもいいならなんで俺を殺してくれなかった？

憎しみの感情も沸いたが、それより俺は強くそのことを思った。なんで世界でたった二人の家族を失って俺は生きているのか。残されるぐらいなら一緒に殺してほしかったと。

「真璃夜さんと沙羅さんに貴方以外のご遺族は？」

「真璃夜は幼いころ本当の両親に捨てられて、教会の孤児だったのを母が養子にしたのでわかりません。多分俺だけです。

母も俺以外の家族はいません。

祖父母は母が18の時亡くなって、兄弟も親戚もいません。

父は俺が4歳の頃にKillされました。」

Killとはマナを壊され殺されることの意味だ。

医師はそうですか、と言ってこう続けた。

「お二人とも17、38歳とお若くて良かったですね。」

(……こいつ何言っただ?)

「どう言う意味ですか？」

医師は俺の言葉に一瞬キョトンとしていた。

「若いので、リサイクルされてもまだ、真璃夜さんなら70年、沙羅さんのマナでも40年は生きられますし、それなら貴方の妹さん、お母様の代わりとして生きて行くなら十分な時間だと思います。

最初は知らない人間どうして暮らすのは大変かと思いますが、貴方が協力してリサイクルされた方サポートしてあげて下さい。」

医師は自分が正しいことを言っているような、満足そうな顔をしていた。

「……アンタ頭おかしいだろ。」

「え？」

「聞こえてねえならもう一度言っただけよ。」

アンタ頭おかしいだろう!!!」

俺は今まで出したことがないような声で医師に怒鳴った。

「若いからまだ家族の代わりとして生きていける？」

家族が死んだってまたリサイクルされるから大丈夫ってアンタ殺人者と考え一緒じゃん。

俺は代わりなんていらねーんだよっ！

俺の家族は母さんと真璃夜だけだ！！！！

なのに他の人間が代わりになれるハズなんてねえだろうがよっ……

！！！！」

医師は何故俺を怒らせてしまったのかわからない、といった不思議そうな目をしていた。

「やめてください！ここは病院ですよ！？」

看護婦の声にふつと我に返った。

「っ……すみません……」

医師は苦笑いをして、

「い……いいんですよ。ご家族を亡くされて気が立っていたのでしよう。」

と言った。

翌々日。

母さんのマナも20日の午前0時に発見された。

やはりマナだけの状態だったようだ。

二人のマナはリサイクルも終了して名もそれぞれ違った名前をもっているらしい。

今日はその二人との面会日であった。

俺はまだもやもやした気持ちだった。あの医師の言葉に。

19日から今日までで大分気持ちは収まった。
医師の言った言葉もふつうの一般論にすぎないと。
だが俺はまだ二人が死んだを悲しみ悔んでいる。
あの時の医師への怒りも忘れていないし、偽りではなかった。
（医師は普通のことを言ってる筈だ・・・だけど俺はあの言葉は今だに理解できない。俺がおかしいだけなのか？）

面会室入ると一人の女の子が中にいた。

そのまま10分ほど無言で部屋にいたのだが、
その子がいきなり

「・・・かわいい・・・」

と言った。何が？と言うと、ハッと我に返ったようで、

「スツスミマセンっ えと・・・その・・・あの あっ貴方の携帯に付いてるストラップがかわいいなあって。」

これのこと？と俺が返すと、

「はいっ！そのかわいいサイの子ですっ！！」

一発でサイとわかる人間は少ないので少し驚いた・・・とゆうより感心した。

ストラップは真璃夜のクリスマスプレゼントに買ったワタナベだった。

贈る人間ももういないと思い適当に付けていた。

「・・・かわいい。なんていうお名前なんですか!？」

「・・・ワタナベさんって言うキャラクター。」

「ワタナベさん・・・素敵なお名前・・・えと、桜栗さんはワタナベさんがお好きなんですか？私は人目でこの子の魅力にやられてしまったみたいです。」

（真璃夜と同じワタナベ教になりそうだな・・・いい子そうだけど性格は全然違うみたいだな。）

感情表現がおおきく明るい子だった。

（あれ？でも・・・）

「あのなんで俺の名前知ってるの？初対面だよな？」

その子はあつ、と言う顔をしたのと同時にノックの音がして医師と女性が入ってきた。

「済みません。お待たせしました。日笠^{ひかさ}さん彼に自己紹介はお済になりましたか？」

「ごめんなさい、まだです。と、その子は答えた。」

「ではお二人とも桜雫さんに自己紹介を。名前と年齢だけで結構です。」

医師がそう言うと、女の子のほうから自己紹介を始めた。

「ひ、日笠^{ひかさ}祈^{いのり}ですっ！10（じゅう）・・・7（なな）です。」

次は女性が、

「佐藤香織と申します。38になります。」

「医師^{せんせい}・・・このお二人は？」

「？ 桜雫真璃夜さんのリサイクル、日笠祈さん。」

医師は女の子のほうにかざした手を次に女性に。

「こちらは桜雫沙羅さんのリサイクル、佐藤香織さん。」

嘘だろ？この子とこの人が二人のリサイクル？

全くの別人。わかっていた事だった。

リサイクルされた人間が二人とは違う事なんて。

だが何処かで二人の面影があるのではないかと勘違いしていた。

真璃夜は長い黒髪に整ったキレイな顔立ちをしていた。

だがその日笠祈という人間は先ほど話した印象では性格も全く違う印象をうけた。

髪も栗色のセミロングで、顔は整っていて美少女だがキレイというよりカワイイ雰囲気だった。

佐藤香織は性格はわからないが、容姿はどこにでもいる日本人の顔

立ちをしていた。

母さんはイギリス人なので、純潔の日本人にはとても見えなかった。
「・・・少しトイレ言ってきたいいですか？」

俺はとりあえず気を落ち着かせようと面会室の外に出た。

途中廊下で二人の看護婦が立ち話をしていた。

一人は俺がキレそうになった時、医師に付き添っていた看護婦だった。

「もうびっくりしちゃった。医師の首元つかんで、医師の頭がおかしいだの、家族の代わりはいらなとか・・・おかしいのはアンタでしょ！と思つたわ。」

「親戚いないんでしょう？新しい人とやっていけるのかしら？やっていけないとしたら一人暮らしよね。まだ高校生でしょう？」

「なんかそう言う場合国から生活保護もらえるみたいよ。一人で生活できる程度にはもらえるでしょう。」

「にしてもその男の子、考えが変というか・・・おかしいというか・・・狂ってる？」

「そうよねえ。これから先どうするのかしら。」

盗み聞きするつもりはなかった。だが俺はその看護婦の話を聞いて、確信した。

狂ってるのは俺でもない。医師でも看護婦でもない。

この世界の常識そう、

狂っているのはこの世界だ。

俺は病院で適当に自己紹介をし、家に帰って今後の事を話し合うようにと、医師に言われた。

「じゃあ、祈ちゃん志紋君、この先どうしましょうか？」

佐藤香織がそう言つと日笠祈が、

「住むとこないの……とりあえずここに住ませてもらいたいです。」

佐藤香織もその意見に何故か嫌々そうに同意した。

「じゃあ3人で住む……でいいかしら？」

「あの俺ここ出ます。」

二人は驚いた顔をした。

「やっぱり女性同士のほうが一緒に住みやすいと思いますし。」「
適当な理由をつけた。」

「あのつでも1人じゃ大変じゃないですか？お金とか……」
と日笠祈は心配そうに言った。

(偽善者……)

そう思った。同時にそう思う自分が嫌だった。

「バイトしてるんで。それに生活保護もでるみたいですし。新しい家が見つかり次第、出て行くんで。」

「そ……そう。志紋君がそう言うなら止めないわ。個人の意見は尊重しないとね。あ、でも家が見つかるまではいくらでもいてね」
今この家は事実上佐藤香織の家だ。

佐藤香織はうれしそうな顔をしていた。自覚はないようだが隠しきれていなかった。

12月30日。

冬休みに入り、家も決まった俺は真璃夜、母さんと10年過ごした家を出て行く日が来た。

朝9時。

佐藤香織に一応挨拶をして荷物をまとめ、門の前で家をしばらく見つめ、歩き出した。

「志紋君……！志紋君！！」

少し歩いたところで名前を呼ばれる。振り返るとそこには日笠祈がいた。

「本当に家……出ってっちゃうの？」

背を向け無言で頷く。

「でもずつとあそこに住んでたんでしょ？なのに……いなくなっちゃうの？」

「あそこはもう佐藤さんの家だ。アンタも住むとこないなら勝手に住んでれば？」

「違う……違うよ。」

あそこは……あの家は……桜家でしょ？

他の誰の家でもない！

出て行く必要なんて……」

「……だまれ。だまれよ！！」

そう叫んだ。

「アンタに俺の気持ちわかるわけ？わからねーだろ。」

確かにあの家は3人の思い出の場所だ。けどな思い出があるから辛いんだ……！居られないんだ……！！

しかも俺の家族の命でマナのうと生きてるアンタ達と一緒に暮せ？支えになれ？馬鹿にしてんじゃねーよ。

アンタ達は代わりなんかじゃない。

俺は人とすら認めてない。」

そんな狂った常識認めたくない。

「わかった。……サヨナラ。」

顔は見えなかったがいつもの声の調子で日笠祈は言った。

そしてまたこうつぶけた。

「……あたし！あの時君に会えて良かったと思うんだ。

君会えなきゃワタナベさんにも会えなかったし！ハハハっ。」

……あの時少し話せてうれしかったよ。」

俺は携帯についていたワタナベを地面に捨てた。

見るたび真璃夜を思い出す。

悲しくなる。

見るたび日笠祈を思いだして嫌になり、

そう思うたび自分が嫌いになりそう。

そのまま俺は日笠祈の前から去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8330n/>

Only Heart ~ 学生編 ~

2010年10月14日11時18分発行